

## 野上弥生子とバーナード・ショー

—『シーザーとクレオパトラ』—

田村道美\*

## 1

野上弥生子は大正十二年七月三十一日から同年八月二十三日まで、家族と共に日光湯元温泉で一夏を過ごす。この夏の避暑地での読書の皮切りとして、弥生子は八月二日に「ゲーテのイフゲナイア<sup>(1)</sup>」を読んでいる。これは二ヶ月ほど前に刊行されたゲーテ作、舟木重信譯『イフゲニエ』(岩波書店、大正十二年五月二十日)であろう。そして、彼女は八月八日から「シヨオのシイザアとクレオペートル」を読み始め、同二十二日に読了している。

八日、朝早くおきてシヨオのシイザアとクレオペートルをよみはじめる<sup>(2)</sup>。

九日 朝から昼までシヨオ、午後は少しひるねした<sup>(3)</sup>。

十日 シヨオの一と幕がすむ。平気によめるからうれしい。何等の困難もない。笑ひ々々おかしがりながらよめる<sup>(4)</sup>。

十四日 ショーを少しよみ<sup>(5)</sup>。

十五日 午前シヨオの二幕までよみ終える。午後はそれを兄さん [夫豊一郎のこと—筆者注] の前でよむ。先によんでるところは字をひどく忘れ [て] るるのにおどろく。しかし意味は余りあやまらないでとれる<sup>(6)</sup>。

十七日 午前は例によりシヨオ<sup>(7)</sup>

十八日 シヨオの三幕目読了、この幕はきつとやんやといふ喝采を博するものだらうとおもふ。帝劇などでやるときつとよいとおもふ<sup>(8)</sup>。

十九日 読書はシヨオ<sup>(9)</sup>。

二十二日 シヨオがすむ<sup>(10)</sup>。

「シヨオのシイザアとクレオペートル」とは英国劇作家ジョージ・バーナード・ショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) の『シーザーとクレオパトラ』( *Caesar and Cleopatra*, 1901) のことであろう。十日の日記に見える「平気によめるからうれしい。」や十五日の「意味は余りあやまらないでとれる。」から、彼女がこの戯曲を原書で読んでいることが分る。弥生子は四十代前後の時期にも、英語の力が衰えないようにと、避暑地で英語の書物を読むことを自分に課していたようである。たとえば、昭和三年八月二十日の日記に弥生子は「ふだんは執筆やその他の読書に時間をとられて原書でゆつくりよむひまを持たないから、せめて夏休み中は必ずとも何か一冊よみ破る習慣を失つてはならない<sup>(11)</sup>。」と記している。そして、この年の夏には、ショーの『シーザーとクレオパトラ』を原書で読むことにしたようである。彼女がこの作品を選んだの

\*助教授 教育学部 (英米文学)

は夫豊一郎に一読を勧められたからであろう。豊一郎は大正十二年七月以前に、「彼はなぜ彼女の亭主にうそを吐いたか」(『自由講座』、大正二年六月十五日-七月二十一日)や『結婚論』(新潮社、大正六年十二月十五日)を訳したり、「バアナアド・ショウの恋愛観」(『新潮』、大正四年十一月一日)や「性は無人格である-<sup>シオ</sup>の性に関する意見」(『新小説』、大正十年一月一日)などの評論を書いている。それ以後も、『聖ヂョウン』(第一書房『近代劇全集』第三十九巻「英吉利篇」、昭和五年十二月十日)を訳したり、評伝『G. B. Shaw ショー』(研究社英米文学評伝叢書72、昭和十年三月十五日)などを著している<sup>99</sup>。

弥生子は十日の日記に「シヨオの一と幕がすむ。平気によめるからうれしい。何等の困難もない。笑ひ々々おかしがりながらよめる。」と記しているが、これは『シーザーとクレオパトラ』の第一幕では五十二歳のシーザーと十六歳のクレオパトラの出会いが滑稽な筆致で描かれているためであろう。

月夜の砂漠の中にスフィンクスが聳えている。そのスフィンクスを見上げながら、シーザーは「おれはお前が象徴してゐる人間だ<sup>100</sup>」と話しかける。そのスフィンクスの胸の所に十六歳のクレオパトラが眠っている。彼女は恐ろしいローマ軍がエジプトに攻め込んで来たと聞いて、怖くなってスフィンクスのところへ避難したのであるが、いつの間にか寝入ってしまったのである。しかし、スフィンクスに話しかけるシーザーの声で目が覚める。彼女はこの男がシーザーだとは露知らず、ローマ人に見つからないうちに、自分のいる所まで上がって来るようにと言う。シーザーは言われた通りクレオパトラのところへ来る。そして、二人の間で次のような滑稽なやり取りが交わされる。

「ね、ローマ人つてみんな長い鼻で、象牙のような牙があって、尻つぼがあつて、手が七つあつて、一つ一つに百本づゝ矢を持つて、それで人間を食べるのだつて。」

「クレオパトラ、お前おれの顔が見えるかい。」

「見えるわ。月のやうに白いわ。」

「おれの顔がエジプト人より白いのを月のせいだと思ふかね。ぢや鼻はどうだ。これがローマン・ノーズ(ローマ人型の鼻)と云ふのだ。」

クレオパトラは喫驚して、スフィンクスの肩を廻つて砂上に飛びおり、かう叫びながら祈ります。

「スフィンクス、あの男を二つに噛み切つて下さい<sup>100</sup>。」

上の訳は、弥生子が昭和十三年五月一日発行の『婦人之友』に発表した「近代劇物語、バーナード・ショウ作「シーザーとクレオパトラ」」から引用したものである<sup>99</sup>。この箇所にあたる原文は次の通りである。

CAESAR. Why? Are you afraid of the Romans?

CLEOPATRA [*very seriously*] Oh, they would eat us if they caught us. They are barbarians. Their chief is called Julius Caesar. His father was a tiger and his mother a burning mountain; and his nose is like an elephant's trunk. [*Caesar*

*involuntarily rubs his nose*]. They all have long noses, and ivory tusks, and little tails, and seven arms with a hundred arrows in each; and they live on human flesh.

CAESAR. Would you like me to shew you a real Roman?

CLEOPATRA [*terrified*] No. You are frightening me.

CAESAR. No matter: this is only a dream—

.....

CAESAR [*as the conviction that he is really awake forces itself on him*] Cleopatra: can you see my face well?

CLEOPATRA. Yes. It is so white in the moonlight.

CAESAR. Are you sure it is the moonlight that makes me look whiter than an Egyptian? [*Grimly*] Do you notice that I have a rather long nose?

CLEOPATRA [*recoiling, paralysed by a terrible suspicion*] Oh!

CAESAR. It is a Roman nose, Cleopatra.

CLEOPATRA. Ah! [*With a piercing scream she springs up; darts round the left shoulder of the Sphinx; scrambles down to the sand; and falls on her knees in frantic supplication, shrieking*] Bite him in two, Sphinx: bite him in two.<sup>98</sup> (アンダーラインは引用者)

上の原文を一読すれば明らかなように、ショーの『シーザーとクレオパトラ』はきわめて平易な英語で書かれている。弥生子が八月十日の日記に「平気によめるからうれしい。何等の困難もない」と記している所以である。また、筆者がアンダーラインを施した部分が弥生子の訳している箇所である。原文と訳文とを照らし合わせてみると、弥生子の訳は概ね正確であるといえよう。ただし、誤訳が二箇所ある。一つは「月のように白いわ。」である。原文“*It is so white in the moonlight.*”の‘*in the moonlight*’は「月の光を浴びて」、或は「月明かりの中で」という意味である。したがって、この文を訳せば「あなたの顔は月明かりでとても白く見える。」となる。クレオパトラはシーザーを自分と同じエジプト人と思い込んでおり、その顔が白いのは月明かりのせいだと考えている。だからこそ、シーザーは「おれの顔がエジプト人より白いのを月のせいだと思ふかね。」とクレオパトラに問いかけたのである。もう一つの誤訳は「砂上に飛びおり」である。‘*scrambles down to the sand*’は「砂上に這い下りる」という意味である。いくら恐怖に駆られたからといって、十六歳の少女が巨大なスフィンクスの肩から砂上に「飛び下りる」というのは無理であろう。

なお、この第一幕で最も「おかしい」場面は、単純で臆病なクレオパトラを女王に相応しく振舞わせようとするシーザーの最初の試みが成功を収めるシーンであろう。すなわち、クレオパトラがシーザーという虎の威を借る狐よろしく、それまでその言いなりになっていた乳母頭のフタタティータに、高飛車な態度で部屋を出て行くように命じたあと、それだけでは気がおさまらず蛇の皮でフタタティータを鞭打とうとする場面であろう。

弥生子は十八日の日記に「シヨオの三幕目読了、この幕はきつとやんやといふ喝采を博するものだろうとおもふ」と記している。第三幕はシシリア人貴族で芸術家でもあるアポロドラスがクレオパトラに献上するための絨毯を持ってアレキサンドリアの宮殿を訪れるところから始まる。

一方、クレオパトラはファロス島の燈台で孤立しているシーザーのところへなんとかして行きたいと考えているが、ローマ人の哨兵がファロス島へ渡る許可を与えてくれない。そこで彼女は一計を案じて、アポロドラスの持参した絨毯の中に身を隠してまんまと同島へ渡ることに成功する。しかし、エジプト人に包囲されているシーザーには、クレオパトラのこの無邪気な冒険を喜ぶだけの心の余裕はない。彼にはこの窮地からどう脱すべきかということしか念頭にないからである。その時、アポロドラスが沖の方に味方の艦隊の船影を認める。アポロドラスはその戦艦まで泳いで行って、そこから救助のボートを送って寄越すために、海の中に飛び込む。それを見て、シーザーはアポロドラスに続いて海に飛び込もうとする。ローマの士官ルフィオはシーザーにもしものことがあってはと引き止めようとするが、シーザーはルフィオの忠告に耳を貸そうとしない。一方、泳げない自分はどうなるのかと問うクレオパトラに、シーザーは背中のにせて戦艦まで連れて行ってやると答える。

クレオパトラ だって私は！ 私は！！ 私は！！ 私はいったいどうなるの？

シーザー 私はあなたをイルカのように、戦艦まで背中のにせて運んであげるよ。ルフィオ、私が水面へ浮き上るのを見たら、この人をほうりこんでくれ。この人は引き上げたよ。そのあとから、君たち二人もとびこむんだ。

クレオパトラ いやよ、いやよ、いやよ。私、溺れ死にをってしまうわ。

(中略)

シーザー (海のむこうへ大声で) おーい、アポロドラス。(彼は空を指して、舟唄の文句を引用する)

高い青空うく白雲は――

アポロドラス (遠方で泳ぎながら)

みどり野に咲くゆかり色

シーザー (得意になって) やあやあ！ (海へとびこむ)。

クレオパトラ (興奮して階段に走りより) ねえ、見せて。あの人溺れるわよ。(ルフィオ彼女を捕える) まあ――まあ――まあ！ (彼は叫んでいる彼女を海へ投げこむ。ルフィオとブリタナスどっと笑う)。

ルフィオ (彼女の後を見おろして) シーザーがとっつかまえた。(ブリタナスに) この防塞を守るんだよ、ブリトン人。シーザーはお前を忘れはしない。(彼はとびこむ)。

ブリタナス (階段まで駆けつけて、彼らの泳ぐのを見守りながら) みんな無事ですか、ルフィオ？

ルフィオ (泳ぎながら) みんな無事だよ。

シーザー (はるか彼方を泳ぎながら) 上の方の燈臺へ避難して、落し戸に薪をつんでおけ、ブリタナス。

ブリタナス (大声で答えて) まず第一にそうしておいて、それから私の國の神々に祈りましょう。(海の方から歡呼の聲。ブリタナス思い切り興奮して) ボートがシーザーのところまで漕ぎ着けた。ヒップ、ヒップ、ヒップ、フレー！<sup>10)</sup>

弥生子が「この幕はきつとやんやといふ喝采を博するものだらう」と日記に記しているのは、上の場面、五十余歳のシーザーがイルカのように十六歳のクレオパトラを背中に乗せて味方の戦艦まで泳いで行くという愉快的場面があるためであろう。なお、引用の最後でブリタナス〔古代ブリトン人で、シーザーの秘書官を務める。現代のイギリス人を諷刺する目的でショウが創り出した架空の人物<sup>98)</sup>〕は「ヒップ、ヒップ、ヒップ、フレー！」と叫ぶが、この“hip, hip, hip, hurrah!<sup>99)</sup>”は『オックスフォード英語大辞典』によれば十九世紀前半頃から使われ出した応援の掛け声であるという。ショーの『シーザーとクレオパトラ』には意図的な時代錯誤が至るところに見られるが、この「ヒップ、ヒップ、ヒップ、フレー！」もそのような時代錯誤の一つであろう。紀元前の人間であるブリタナスが興奮の余り思わず「ヒップ、ヒップ」と叫び出すのを聞いて、イギリス人観客がどっと大笑いするであろうことは想像に難くない。

## 2

大正十二年八月二十四日、フランク・ヴェデキントの戯曲『春の目ざめ』の改訳を仕上げたまままで日光湯元温泉に留まるという夫を残して、弥生子は息子たちと共に帰京する。それから一週間後の九月一日の十二時頃、関東大震災が起こる。その日の日記によれば、弥生子は息子たち三人を連れて近くの日暮公園に避難したという。しかし、地震の揺れはおさまらず、火事があちこちで起こっているため、その夜は同公園に野宿することにしたい。このときの火事の詳しい様子や弥生子がそれを見てどのような感想を抱いたかは同年十月一日発行の『改造』第五巻第十号に掲載された「燃える過去」と題する文章によって知ることができる。

大正十二年九月一日の午後二時過。あの恐ろしい地震を近所の小さい公園の中に避けてゐた私たちは、西南の方に当って二三の爆音を聞いたと思ふうちに、今まで正面の空一杯に立ち塞がってゐた尨大な雲の峰——夜に入ると共に、これは下町のもの懐い火焰の姿を現はしたのであるが——とは別な黒煙を千駄木の森越しに認めた。本郷の大学が燃えてゐるのだと云うことが分つた頃には、私たちの頭の上には盛んに灰が降つて来た。灰の中には多くの紙片が交つて飛んで来た。よく気をつけて見るとそれは書物の燃え屑らしかつた。黒く焦げてはゐるけれども、或る紙片の表には明らかに古本らしい印刷の文字が読まれた。ラテン語の燃え屑を拾つた人もあつた。私たちは図書館が焼けつつあることを聴て知つた。

「知識の宝庫が燃えてゐる。」

少しでも書物を愛することを知つてゐる者は、戦慄なしにそれを見ることは出来ない筈である。私は目の前の空に流るゝ煙を眺めながら頭に降りかゝる灰と、絶えず起る地震の中で、様々なことを考へ続けた。私は五六日前までゐた日光の山の中で毎日楽しみにして読んだ書物の一つの中に、恰度今目前の光景と同じ場合を描き、且つ、その貴重な焼失物に対して独得の果敢な解釈を与えてゐたことを思ひ出した。それはバーナード・ショオの戯曲で、アレキサンドリアの図書館の火事に際する、シーザーと王トレミーの師、シオドタスの対話であつた。私は地震と火事の騒ぎがやつと静まつて、久しぶりに自分の机の前に座つた時、その対話の下に記念のために線を引いた。それは斯うである。——

シオドタス　みんな焼けてしまつたのです。シーザー、あなたは書物の価値も分らない野

蛮な軍人として後代に示され度いのですか。

シーザー シオドタス、わたしだつて著作者だ。が、エジプト人は一にも書物、二にも書物で酔生夢死の生涯を送るよりは、自分たちの本統の生活をする方が大事だ。

シオドタス 不朽の書物は十世紀にやつと一冊きり出来はしません。

シーザー その書物だつて人類に役立たなくなれば焼かれるだろう。

シオドタス 歴史がなくなれば、死はあなたを一兵卒の横に寝かせますよ。

シーザー 死はどんな時だつてそうなのだ。わしはそれ以上の墓を求めはしない。

シオドタス 其処に焼けてゐるのは人類の記憶です。

シーザー 恥づべき記憶だ。燃えるがよい。

シオドタス あなたは過去を滅ぼす積りですか。

シーザー なに、その廃墟で未来を建設するのだ。だが、聞き給へ、シオドタス、君と云ふ人はポンペイの首をば羊飼が一箇の玉葱を買ふほどにも買はなかつた癖に、間違ひだらけの、けちな羊皮のために、老の目に涙をためてわしの前に跪く。だが、わしはただの一人もバケツ一杯の水もそのために貸しはしない……<sup>98</sup>

弥生子は東大の図書館が燃えているのを知ったとき、「知識の宝庫が燃えてゐる」と戦慄を覚えたようである。そして、頭に降りかかる書物の灰を呆然と眺めながら、日光湯元温泉で読んだ『シーザーとクレオパトラ』の中に描かれている世界七不思議の一つであるアレキサンドリア図書館炎上の場面を思い起こしていたようである。『シーザーとクレオパトラ』第二幕の終り近くで、アレキサンドリア滞在中のシーザーはローマ占領軍の指揮官アキラスがエジプト人と共謀して、謀反を起こしたとの知らせを受ける。シーザーは西の港に停泊している自軍の船を焼き払うよう命じる。間もなくトレミーの傳育係で学者のシオドタスが血相を変えて飛び込んで来る。ローマ軍の船の火が燃え広がって、アレキサンドリア図書館に燃え移ったというのである。図書館の火事を消し止め、貴重な蔵書を救ってほしいというシオドタスの嘆願に、しかしながら、シーザーは関心を示さない。今は消火に人手を割けないという事情にもよるが、それ以上に興味深いのは、シーザーの書物に対する考え方である。彼は書物よりも実際の生活を、過去よりも未来を建設することに大いなる関心を寄せている。そして、過去の叡智の宝庫たるアレキサンドリア図書館が炎上するのを目の当たりにしながら、「燃えるがよい。」と冷然と言い放つ。このシーザーの言葉の中に弥生子は作者ショーの「独得の果敢な解釈」を読み取ったのであろう。

弥生子が「燃える過去」の最後で引用しているシーザーとシオドタスの会話は原文では次のようになっている。

THEODOTUS [*unable to believe his senses*] All! Caesar: will you go down to posterity as a barbarous soldier too ignorant to know the value of books?

CAESAR. Theodotus: I am an author myself; and I tell you it is better that the Egyptians should live their lives than dream them away with the help of books.

THEODOTUS [*kneeling, with genuine literary emotion: the passion of the pedant*]  
Caesar: once in ten generations of men, the world gains an immortal book.

CAESAR [*inflexible*] If it did not flatter mankind, the common executioner would burn it.

THEODOTUS. Without history, death will lay you beside your meanest soldier.

CAESAR. A shameful memory. Let it burn.

THEODOTUS [*mildly*] Will you destroy the past?

CAESAR. Ay, and build the future with its ruins. [*Theodotus, in despair, strikes himself on the temples with his fists*]. But harken, Theodotus, teacher of kings: you who valued Pompey's head no more than a shepherd values an onion, and who now kneel to me, with tears in your old eyes, to plead for a few sheepskins scrawled with errors. I cannot spare you a man or a bucket of water just now;...<sup>21)</sup>

原文と訳文とを照らし合わせてみると、弥生子はショーの平易な表現を概ね忠実に再現していると言える。気になる箇所といえば、「十世紀」と「人類に役立たなくなれば」の二箇所である。‘a generation’とは一世代、約三十年間の期間を指すから、‘ten generations’を十世紀と訳すのは正しくない。ただ、十世代と訳すとそれがどれ位の期間を表すのか読者には必ずしもピンとこないかもしれないと考えたため、さらには、不滅の書物はそう簡単に生れるものではないことを強調するために意識的に十世紀を用いたのかもしれない。‘flatter’は「お世辞をいう」、「おべっかをいう」という意味である。これは‘generation’同様、基本的な単語でその意味を取り違えるはずはないと思われるのであるが、弥生子は‘not flatter’を「役立たない」と訳している。弥生子はショーの描くシーザーを「政治家としては英国紳士の如く事務家<sup>22)</sup>」と捉えている。そのような人物の考え方をここに読み取り、人類に役立たない書物は焼かれて当然と言わせているのであろうか。或いは、その後続く‘the common executioner’の意味がよく分からず、それを訳出しないですませるために先のような訳を考え出したのかもしれない。

手許にある山本修二譯『シーザーとクレオパトラ』（岩波文庫、昭和二十八年五月二十五日）を見ると、‘If it did not flatter mankind, the common executioner would burn it.’は「それが人類におべっかを使っていないと、やくざな執行吏がそれを焼いてしまうだろう<sup>23)</sup>。」と訳されている。山本氏は‘common’を‘low-class, vulgar, unrefined<sup>24)</sup>’の意に解されているようである。しかし、‘the common [public] executioner’ないしは‘the common hangman’とは死刑囚の首を刎ねたり、絞首刑に処したりする役人のことである。たとえば、シェイクスピアの喜劇『尺には尺を』（*Measure for Measure*）の第四幕第二場で、典獄がポンピーに向かって“Here is in our prison a common/executioner, who in his office lacks a helper<sup>25)</sup>.”という場面ある。平井正穂訳では「この監獄には死刑執行人が一人はいるのだが、仕事をやるのに助手がいるとっている<sup>26)</sup>。」、小田島雄志訳では「だがこの監獄には執行人は一人しかおらず、手がたらんのだ<sup>27)</sup>。」となっている。『オックスフォード英語大辞典』によれば、この‘common’は‘of or belonging to the community at large, or to a community or corporation; public<sup>28)</sup>’の意である。しかし、この‘common’は訳しにくいし、また無理に訳出しようとするとな妙な日本語になってしまう。平井・小田島両氏がこの語を訳出していないのはそのためであろう。

『オックスフォード英語大辞典』で ‘hangman’ の項を見ると ‘A man whose office it is to hang *condemned persons*; also more generally, an executioner, a torturer, racker. *Common hangman*, the public executioner’ とある。この定義からも ‘the common [public] executioner’ は ‘the common hangman’ と同じ意味の語であると考えて間違いないであろう。この ‘the common hangman’ がシェイクスピアのロマン劇『ペリクリーズ』(*Pericles*)の第四幕第六場のボウルトとマリーナのやり取り中に二度出てくる。

*Boult.* I must have your maidenhead taken off, or the common hangman shall excuse it.

.....

*Marina.* Do any thing  
But this thou doest....  
Serve by indenture to the common hangman<sup>69</sup>.

御興員三氏はこの場面のボウルトとマリーナの科白をそれぞれ「その生娘とかいうやつと別れてもらおうってわけよ。それとも、首切り役人に頼んで、首と胴体と別れてもらおうか。」「いまの仕事でさえなければ／どんな仕事でもいいではありませんか。／・・・首切り役人の弟子入りでもなんでも／いまの仕事よりはずっと増しです<sup>69</sup>。」と訳されている。また、小田島訳では「おめえがその処女の操とやらにおさらばするところにさ、なんなら首斬り役人に頼んで、おめえの首が胴体とおさらばするところだっていいんだぜ。」「なんでもいいわ、／いまの仕事以外のことなら。／・・・首斬り役人の見習いだって／いまよりはるかにましだわ<sup>69</sup>。」となっている。御興・小田島両氏の訳語「首切 [斬] り役人」にも、やはり ‘common’ は訳出されていない。また、名著『フランス革命の省察』の著者エドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-97) の『植民地との和解決議の提案に関する演説』 (*Speech on Moving Resolutions for Conciliation with America*, 1775) の中に ‘Did they burn it by the hands of the common hangman?<sup>69</sup>’ という文があるが、中野好之氏はこれを「彼らはそれを絞刑吏の手によって焚書にしたか?<sup>69</sup>」と訳されている。この「絞刑吏」という訳語もなかなかの苦心作と思われる。

ところで、ここで注目したいのは、今例に挙げたバークの一文が示すように、首切り役人は焚書の刑も行っていたらしいということである。次の三つの例を見られたい。最初の例は『チェインバーズ英語辞典』<sup>64</sup>、あとの二つは『オックスフォード英語大辞典』からのものである。いずれも原書が手許にないので、引用箇所的前後関係が不明であるが、参考までに拙訳を付した。

I'd not bate one nail's breadth of the honest truth, though I were sure the whole edition of my work would be bought up and burnt by the common hangman of Conneticut. *Irving*, Knickerbocker, p.219.

(私の作品のすべての版がコネティカット州の首切り役人に買い占められ焼かれるであろうことは間違いのないと思っていたが、私の作品がまぎれもない真実を語っていることを撤回するつもりは毛頭なかった。)



1647 LARENDON *Hist. Reb.* II. § 51 A Paper..avowed to contain the matter of the Treaty, was burned by the Common Hang-man

(その条約の問題に触れていることを明言している書類は首切り役人によって焼かれた。)

1849 MACAULAY *Hist. Eng.* ii. I. 175 The Commons began by resolving..that the Covenant should be burned by the hangman in Palace Yard.

(下院議員連は手始めに、宮殿の中庭で首切り役人にその誓約書を焼かせるべきであると決議した。)

以上の例から、首切り役人が焚書の刑を執行していたことが分かる。それがいつごろまで行われていたかは不明であるが、少なくともショーがこの事実を知っていたことは明らかである。そして、ショーが 'If it did not flatter mankind, the common executioner would burn it.' の一文で言わんとしていることは、「不滅の書物などといっても、人間たちに媚びるようなものでなければ、死刑執行人がそれを燃やしてしまう。」ということではないだろうか。さらに敷衍すれば、「大衆は不滅の書物などに関心はない。彼らは自分たちの心をくすぐるような本にしか興味がない。だから、それ以外の本はいかに貴重であっても、死刑執行人がそれらの本を燃やしてしまうのだ。」ということではないだろうか。筆者の解釈が正しければ、ショーは書物を無闇に有り難がる学者と自分たちの御機嫌をとってくれるような本にしか興味を示さない大衆に対する二重の皮肉をこの一文に込めていると考えられる。

## 3

日光湯元温泉で『シーザーとクレオパトラ』を原書で読んでからほぼ半年後の大正十三年三月二十二日、弥生子は「プルターク」で「シーザー」を読み、日記に次のような感想を記している。

プルタークはシーザーとデメトリュースをよんだ。あの書き方だとシーザーがいかにも殺されても仕方のない野心家だといふ気がする。ショーのシーザーと比較しておもしろかった。而してショーが用ゐた材料がすっかりそのまま出てゐるのも一興であつた<sup>99</sup>。

拙稿「野上弥生子と「世界名作大観」(二) - 『プルターク英雄傳』第一巻 -」でその根拠を示したように、弥生子がこの日読んでいる「プルターク」とは國民文庫刊行會の最初の翻訳叢書「泰西名著文庫」の一つとして刊行されたプルターク著、高橋五郎譯『プルターク英雄傳』第一巻(大正三年九月十五日)であろう<sup>99</sup>。弥生子は、「あの書き方だとシーザーがいかにも殺されても仕方のない野心家だといふ気がする。」と記しているように、プルタークは「ジュリアス、シーザル傳」の前半でシーザーがローマの共和制転覆を目論む野心家であったことを強調している。たとえば、シセロはシーザーのそのような政治的野心を逸早く見抜いていたという。

羅馬の法廷に於ける辯論に由て、シーザルの能辯は忽ち著大なる信用と賞讃を博したが、彼は又其態度の愛嬌に富んで<sup>やはらか</sup>怡和なるを以て羅馬人民の驕心を<sup>くわんしん</sup>収攬した、是れ彼は其態度上に年齢に似合ぬ機轉と禮讓を現したからである。同時に彼は門戸を開放して、公衆を其食卓に歓迎し、

盛宴を張つて天下の志士を饗應したので、次第に其勢力を政治界に擴むるに至つた。シーザルの敵たる人々は、彼が勢力の勃興を蔑視し、并は黄金の竭きると同時に忽ち地に落ちる種類に過ぎぬと臆斷したが其間に彼が威望は日に月に駭々として民衆の間に膨張しつつあつた。シーザルの勢力終に確立して、最早動かすべからざるものとなり、今や公然羅馬の政體を一變しやうとする勢を示すに及んで、政敵輩は茲に始めて目が醒めたが、時は既に晚かつた。彼らは愕然として語つた、初發は如何に微々たるにもせよ、努めて倦まざれば、必ず大を成すであらう、危険を最初に輕んずるは、之をして最後に不可抗的なる者と成らしめる所以であると。

さすがにシセロは第一番にシーザルの此温和謙讓なる態度の中に政治的大野心の萌芽を看破し、其莞爾たる微笑の裏面に危険極まる覇氣の潜みをを端倪した。即ちこの雄辯家は言つた、『我は彼が凡て企圖し、計畫する所の中に壓制家の爪牙を發見する、然しながら彼が一本の指を以て其髪を奇麗に整へながら客に接するを見る時には、斯る人が羅馬共和國を覆へさうといふ最も危険なる謀計を懷いてるやうとは、夢にも思はれぬ』と<sup>87)</sup>。

弥生子は大正十四年八月十七日、避暑先の千葉県鵜原で「世界名作大觀」第二部（各國篇）附録第一巻、高橋五郎譯・幸田露伴補筆並評『プルターク英雄傳』第一巻（國民文庫刊行會、大正十四年七月三十一日）で、「アレキサンデル大王傳」と「ジウリアス、シーザル傳」を再読し、シーザーについては「梟傑らしい匂ひが少年時代からしてゐる。手腕の偉大には敬服するが、ポリシーのみで、ちつとも純真な美しさがない。殺されるのは無理もないらしくおもはれる<sup>88)</sup>。」と、「泰西名著文庫」版で読んだときと同様の感想を記している。また、弥生子は大正十五年八月十五日から十九日にかけて、十和田湖畔の青森県宇樽部の東湖館で、「世界名作大觀」版『プルターク英雄傳』第二巻（大正十五年三月五日）を読んでいる。十九日には共和制の転覆を計るシーザーと敢然それを阻止しようとするカトーの剛直な姿が対照的に描かれている「少カトウ傳」の後半部を読んで、「小カトオをよんでみるとシーザーをますます梟雄とおもはれる<sup>89)</sup>。」と、シーザーが梟雄であるとの印象を一層強めている。このように、弥生子が『プルターク英雄傳』第一巻と第二巻で「シーザル傳」や「少カトウ傳」を読む度に、シーザーを「野心家」「梟傑」「梟雄」と呼んでいるが、これは『プルターク英雄傳』中のシーザーと『シーザーとクレオパトラ』の中でショーが描いているシーザーとがひどく異なっていると思われたためであろう。

弥生子はバーナード・ショーの描くジュリアス・シーザーを「政治家としては英国紳士の如く事務家であり、戦場では勇士より計略家であり、個人としては虚栄心の強い、子供っぽいところのある、お世辞好きな、滑稽を解する、近代的な文化人<sup>90)</sup>」と分析しているが、そのようなシーザー像とは対照的なシーザー像を『プルターク英雄傳』中に見出して、「比較しておもしろかつた」のであろう。また、弥生子は大正十三年三月二十二日の日記に「ショーが用ゐた材料がすっかりそのまま出てゐるのも一興であつた」と記しているが、「シーザル傳」中のクレオパトラに関する部分を見ると、たしかに、ショーが利用したと思われる箇所を見出すことができる。たとえば、クレオパトラがアポドロラスが贈物として持って来た絨毯の中に隠れてシーザーのもとに行くというエピソードは次の箇所を参考にしたのであろう。

内親王クレオパトラは唯一人の忠僕シシリ人アポロドラスを従へて、一小舟に乗込み、薄暮の比ひ宮城の近くに上陸した。彼女は人に見露はされずに宮闈きうるに入ることの難きを見て、自から毛布に包まった、而してアポロドラスは之を身長たけに結び、一梱こりの荷物の如く背負ひて城門に入り、進んでシーザルの居間に至った。シーザルは先ずクレオパトラの此大膽なる機智に心を奪はれ、後には彼女の談話の嬌艶なるに深く魅せられ、遂に彼女と其兄王との間を和解せしめ、彼女をして其兄と偕ともに埃及エジプトに並び立たしむる事と定めた<sup>41)</sup>。

また、エジプト軍に包囲されたシーザーが海に飛び込み、クレオパトラを乗せて艦船まで泳いで行く場面は、次の箇所をヒントにしたのであろう。

ファロス島のほとりで戦を交へてゐた時に、シーザルは我兵の危急を救はうとて防波堤より一少艇に飛こむ折しも、埃及兵四方より攻かゝつて來たので、海中に飛こみ、辛うじて泳ぎ去った。此時シーザルは一束の貴重書類を持つてゐたので、それを濡らしてはならぬと、片手にて水の上に差擧げ、片手にて泳いだ。シーザルが水に飛こんだのは畢竟幸甚であつた。何故かといふに、シーザルが飛去つて後、其船は忽ち沈んでしまつたからである<sup>42)</sup>。

ただし、『プルターク英雄傳』の「シーザル傳」がショーの『シーザーとクレオパトラ』の粉本であると弥生子が考えているとすれば、それは必ずしも正確ではないようである。『プルターク英雄傳』の「シーザル傳」(一三九頁から二四二頁)中でクレオパトラに関する記述が占める頁数はわずか三頁(二一一頁から二一三頁)にすぎない。しかも、そこに記されている幾つかの逸話はショーの『シーザーとクレオパトラ』第三幕中に描かれている事柄に限定されている。山本修二氏によれば、『シーザーとクレオパトラ』の主たる粉本はドイツの歴史家モムゼンの『ローマ史』であつたという<sup>43)</sup>。

## 4

ショーの『シーザーとクレオパトラ』を原書で読んでからほぼ十五年後の昭和十三年、弥生子は同年五月一日発行の『婦人之友』第三十二巻第五号に『シーザーとクレオパトラ』と題する作品を発表している。この作品は『野上彌生子全集』第Ⅱ期第二十巻「翻訳三」(一九八七年)の最後に収められている。同全集の頁数で言えば、この作品は四七六頁から四九三頁までの二十頁に満たない短いもので、厳密には翻訳ではなく翻案である。その構成を見ると、四七六頁から四七七頁の十行目までが序文にあたる。四七七頁十二行目から四八〇頁一行目までが原書の「プロローグ」[この作品には二つのプロローグ—八九八年と一九一二年—があるが、弥生子は前者によっている]にあたり、四八〇頁三行目から四八七頁十行目までが第一幕、次いで四八七頁十二行目から四九〇頁三行目までが第二幕、四九〇頁四行目から十三行目までが第三幕、四九〇頁十五行目から四九一頁五行目までが第四幕、四九一頁七行目から四九三頁八行目までが第五幕にあたる。したがって、弥生子の『シーザーとクレオパトラ』の半分以上が原書の第一幕にあてられている。その理由は大正十二年八月十日の日記に記されている「シヨオの一と幕がすむ。(中略)笑ひ々々おかしがりながらよめる。」という感想に求めることができるであろう。つまり、

五十二歳のシーザーと十六歳のクレオパトラの滑稽な出会いや、シーザーの後楯を得てフタタティータに仕返しをしようと殴りかかる場面などが愉快で、弥生子はそれらの滑稽な場面を読者に紹介したくて長くなったのであろう。また、第一幕は丁寧に訳してあり、それを利用したために長くなったのかもしれない。当時の弥生子は英語の原書を読む際には訳しながら読むのを常としたらしい。「夏目先生の思い出」の中で、弥生子はブルフィンチの『伝説の時代』を原書で読んだときのことに触れながら、「毎日日課のようにして読み、読むのみでなく翻訳を始めました。ただ読むというだけではほんとうにわからない。翻訳をしてみないと、ほんとうに読んだ、わかったという気がしないというのが、私の気持ちなのです<sup>44)</sup>。」と述べている。また、『シーザーとクレオパトラ』を原書で読んだ一年半後の大正十四年一月二十日の日記に、弥生子は「オヴ〔ィ〕のメタモフォーセスを先によみかけてあつたのでまた続ける。これから毎日かきものをしない時にはこれを読み続けよう。而してぼつ々々訳して見ようとおもふ<sup>45)</sup>。」と記している。この記述からも、当時の弥生子が英語の書物を読む際には訳しながら読んでいたと考えられる。

弥生子の『シーザーとクレオパトラ』はその文学的ないし翻訳的価値を云々するほどのものではないが、彼女が翻案という形でショーのこの作品を紹介しようとした動機には、彼女に『真珠』、『大石良雄』、『秀吉と利休』を書かした動機と相通じるものがあるという意味では注目しておいてよいかもしれない。

弥生子は『シーザーとクレオパトラ』の冒頭に付した序文の最後で次のように述べている。

歴史は『時』と『場所』の隔たりに依つて人の判断を狂はせ勝ちで、古来の多くの英雄はそのため屢々半神的なものに祭り上げられますが、ショウはその代表的な英雄たるシーザーから後光を取り去り、赤裸々の現実な人間として私たちの前に立たせてゐます。それ故此処で見るシーザーは政治家としては英国紳士の如く事務家であり、戦場では勇士より計略家であり、個人としては虚栄心の強い、子供っぽいところのある、お世辞好きな、滑稽を解する、近代的文化人であり、またそれ故にシェイクスピアの描いたシーザーとは、全然別な人格になつてゐることと、言葉の一句一句にショウらしい奇警な皮肉と諷刺が隠されてゐることを見落とさないでおいて頂き度いと思ひます<sup>46)</sup>。

弥生子には史上に名高い人物に題材をとった作品に『真珠』、『大石良雄』、『秀吉と利休』などがあるが、これらの共通点は神話化された歴史上の人物をわれわれと等身大の人間として描いていることである。拙稿「野上弥生子とド・ブーリエンヌ『真珠』と『奈翁實傳』」で指摘したように、弥生子は大正十四年九月初めにド・ブーリエンヌ著、栗原古城譯『奈翁實傳』（玄黄社、大正九年三月十五日）を読み、その第十章の最後でブーリエンヌが小喜劇として紹介しているナポレオンの妻ジョゼフィーヌと故マリー・アントワネットの真珠を巡る秘話に創作欲を刺戟される<sup>47)</sup>。九月三日の日記に、弥生子は「ジョセフィンの真珠の話は短いおもしろい話になるとおもふ<sup>48)</sup>。」と記している。それから二ヶ月後に弥生子は『真珠』と題する小品を完成させる。それは「心の優しい、素直な、誰にも愛想のよい、快活な婦人であつた<sup>49)</sup>」ジョゼフィーヌが、故マリー・アントワネットの所有していた真珠の首飾りに魅了され、次第に狡猾になり、ついには軍事的天才たる夫ナポレオンを巧みに騙し、見事その首飾りを自分のものにするという物語で

ある。

拙稿「野上弥生子と『世界名作大観』(二) - 『プルターク英雄傳』第一巻 -」で見たように、『大石良雄』執筆の動機は、大正十五年一月三日、年始の挨拶に訪れた星野日子四郎〔当時法政大学予科の漢文教師<sup>60</sup>〕から赤穂浪士の話が聞かされたことであった。その日の日記に、弥生子は「伝説上の大石を立派に覆すことが出来る」「興味ある物語である<sup>61</sup>」と記している。そして、岩波文庫版『大石良雄』(昭和十五年九月五日第十一刷改版)の〔解題〕の中で弥生子はその執筆動機について次のように解説している。

赤穂浪士の復讐の裏面にひそむものに就いて私に語ってくれたのは、故星野日子四郎氏である。主君の仇を討つと云ふ武士道の徳操を輝した彼等も、皆が皆はじめの決心でゆるぎなく邁進したわけではなかつた。そこには弛緩もあり、逡巡も生じ、意見の対立も出来た。大石良雄その人もまた考へられてゐるよりは違つた人物で、生れのよい、善良な弱い人がさうであるやうに、引きずるよりは引きずられる傾向にあつた。さうして、最後の行動にまで彼を引きずつて行つた急進分子と雖、純粹な復讐の理念とともに、失職した武士の經濟問題があつたのだ、と云ふ説き方は私の心を打つた。私にはその特別な忠臣蔵が出来あがつた<sup>62</sup>。

また、「軽井沢清談」と題する谷川徹三と大島清との鼎談の中で、弥生子は『秀吉と利休』執筆の動機を次のように語っている。

そうですね、私は人間には特別な人は、あり得ないんじゃないかと思つてね、非常に特別な行動をなさつたとか、特別な偉いことをなさつた人はあるけれども、しかしその反面、やはりその人はわれわれと同じ人であるべきだということね。それだから豊太閤というと、あがめ奉られるだけ上に持ち上げられた人だけけれども、それをいっぺん自分たちと同じ人間のレベルで考えてみたい。そう考えたのと、それから利休というと、茶のほうではほとんど神聖な存在のようになっていて、いろいろな逸話にしても、あの人のすぐれたことや、見事な行動ばかりを証明する。しかしあの人も非常に複雑な、堺の一商人として、ことにあの時代に生きた人として、利休にも何人もの利休が、一人の利休のなかにあつたんだし、豊太閤のなかに何人もの秀吉があつたんだということね、そのことを摘発してみたいと思つて……<sup>63</sup>。

以上の引用からも明らかなように、弥生子は作家の使命の一つは英雄や偉人として神格化された歴史上の人物を「自分たちと同じ人間のレベルで考えて」見ることであるという信念を持っていたようである。したがって、彼女がショーの『シーザーとクレオパトラ』を読んだとき、彼が「代表的な英雄たるシーザーから後光を取り去り、赤裸々の現実な人間として私たちの前に立たせてゐる」ことを知り、「英雄」に対して自分と同じ視点に立っているショーに共鳴し、機会があればこの作品を何らかの形で紹介してみたいと思つたのであろう。また、弥生子が大正十二年八月にショーの『シーザーとクレオパトラ』を読んだことが、彼女に『真珠』(大正十四年)、『大石良雄』(大正十五年)、さらには『秀吉と利休』(昭和三十九年)を書かせる契機の一つになつたのではないだろうか。

## 注

- (1) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一巻「日記一」(岩波書店、一九八六年)、五五頁。
- (2) 同書、五六頁。
- (3) 同書、五七頁。
- (4) 同書、五八頁。
- (5) 同書、六一頁。
- (6) 同書、六二頁。
- (7) 同書、六五頁。
- (8) 同書。
- (9) 同書。
- (10) 同書、六七頁。
- (11) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第二巻「日記二」(一九八六年)、二八一頁。
- (12) 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第六十七巻「森田草平・野上豊一郎・草村北星・白柳秀湖」(昭和女子大学近代文学研究所、平成五年)の「野上豊一郎著作年表」によった。ただし、『結婚論』は未見とあるので、この訳本の初版刊行年月日に関しては筆者家蔵本の初版奥付によった。なお、この『結婚論』はショーの戯曲『結婚』(*Getting Married*, 1909)の序文を訳したものである。
- (13) 「シーザーとクレオパトラ」、『野上彌生子全集』第Ⅱ期第二十巻「翻訳三」(一九八七年)所収、四八一頁。
- (14) 同書、四八二-三頁。
- (15) 渡辺澄子『野上彌生子研究』(八木書店、昭和四十四年)、「野上彌生子年譜」、二八八頁。なお、引用は「シーザーとクレオパトラ」(『野上彌生子全集』第Ⅱ期第二十巻所収)によった。
- (16) *The Complete Plays of Bernard Shaw* (London, Constable and Co Ltd., 1931, pp. 258-9).
- (17) ショウ作、山本修二譯『シーザーとクレオパトラ』(岩波文庫、昭和二十八年)、一二二-四頁。
- (18) 同書、「あとがき」、二一四頁。
- (19) *The Complete Plays of Bernard Shaw*, p. 282.
- (20) 「燃える過去」、『野上彌生子全集』第十八巻「評論・随筆一」(一九八〇年)所収、七一-三頁。
- (21) *The Complete Plays of Bernard Shaw*, p. 271.
- (22) 「シーザーとクレオパトラ」、『野上彌生子全集』第Ⅱ期第二十巻所収、四七七頁。
- (23) ショウ作、山本修二譯『シーザーとクレオパトラ』、八三頁。
- (24) *The Oxford English Dictionary* (1970)の形容詞 common 14.bの定義。
- (25) William Shakespeare, *Measure for Measure* (Cambridge University Press, 1969), p. 61.
- (26) 平井正穂訳『尺には尺を』、『シェイクスピア全集3 喜劇Ⅲ』(筑摩書房、一九六七年)所収、四六頁。

- (27) 小田島雄志訳『尺には尺を』、『シェイクスピア全集 第Ⅱ巻』(白水社、一九七四年)所収、二一五頁。
- (28) *The Oxford English Dictionary* の形容詞 common 5 の定義。
- (29) William Shakespeare, *Pericles: Prince of Tyre* (Cambridge University Press, 1969), pp. 69-71.
- (30) 御輿員三訳『ペリクリーズ』、『シェイクスピア全集 3 喜劇Ⅲ』(筑摩書房、一九六七年)所収、一二〇—一頁。
- (31) 小田島雄志訳『ペリクリーズ』、『シェイクスピア全集 第Ⅵ巻』(白水社、一九七九年)所収、三六四頁—五頁。
- (32) *The Oxford English Dictionary* の形容詞 common 5 の用例。
- (33) 中野好之訳『エドモンド・バーク著作集 2 アメリカ論・ブリストル演説』(みすず書房、一九七三年)、一四二頁。
- (34) *The Century Dictionary Cyclopedia and Atals* (London, 1904).
- (35) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一巻、一二六頁。
- (36) 拙稿「野上彌生子と「世界名作大観」(二) —『プルターク英雄傳』第一巻—」(『香川大学教育学部研究報告』第Ⅰ部第八十九号、一九九三年)。
- (37) 高橋五郎譯『プルターク英雄傳』第一巻(國民文庫刊行會、大正三年)、一四三—四頁。
- (38) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一巻、二八二—三頁。
- (39) 同書、四二八頁。
- (40) 「シーザーとクレオパトラ」、『野上彌生子全集』第Ⅱ期第二十巻所収、四七七頁。
- (41) 泰西名著文庫版『プルターク英雄傳』第一巻、二—二頁。
- (42) 同書、二—三頁。
- (43) ショウ作、山本修二譯『シーザーとクレオパトラ』、「あとがき」、二—一頁。
- (44) 「夏目先生の思い出」、『野上彌生子全集』第二十二巻「評論・随筆五」(一九八二年)所収、三九八頁。
- (45) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一巻、一七五—六頁。
- (46) 「シーザーとクレオパトラ」、『野上彌生子全集』第Ⅱ期第二十巻所収、四七七頁。
- (47) 拙稿「野上彌生子とド・ブーリエンヌ『真珠』と『奈翁實傳』—」(『香川大学教育学部研究報告』第Ⅰ部第八十九号、一九九三年)。
- (48) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一巻、二九五頁。
- (49) 「真珠」、『野上彌生子全集』第五巻「小説五」(一九八一年)所収、三五二頁。
- (50) 法政大学百年史編纂委員会編『法政大学百年史』(法政大学、昭和五十五年)、三八頁。
- (51) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一巻、三五四頁。
- (52) 野上彌生子『大石良雄』(岩波文庫、昭和十五年九月五日第十一刷改版)、「解題」、九—一頁。
- (53) 「軽井沢清談」、『野上彌生子全集』第Ⅱ期第二十九巻「補遺二」(一九九一年)所収、三九三—四〇頁。